

エダマメ新品種 『サヤコマチ』の品種特性と栽培のポイント = 枝付き出荷産地での栽培を中心に =

雪印種苗(株) 千葉研究農場

作物研究室 近江 公

1 はじめに

枝豆は東日本に比較的産地がまとまっており、7月をピークに春先から秋口まで、いわゆる“旬”ものの野菜として栽培されています。特に東京、千葉、埼玉、神奈川等の関東平坦地では古くから葉付きでの束出荷がおこなわれており、冷凍加工枝豆との差別化をはかり、近郊産地としての鮮度を強調した出荷形態がとられています。昨今都会での生ゴミ処理の問題が大きくなりはじめ、枝豆においても葉付きをやめ、袋詰めダンボール出荷（切り枝）が増える傾向がみられますが、束出荷も依然根強い人気があり、夏の風情をかもし出す重要な役割を担っています。

一方、作型でみると、ハウスやトンネル等の早出し栽培が高値で価格が安定しており、5月出荷のハウス、6月出荷のトンネル栽培がこれらの産地でおこなわれていますが、春先の天候が不安定な中での栽培となるため、収穫量の変動が大きく、より着莢性の安定した品種、また、栽培管理方法が求められています。

来春より販売を開始する新品種『サヤコマチ』（試作系統名：S B 1003）は、サヤムスメより熟期のやや早い中早生品種で、これらの産地での早出し栽培で利用できます。特にサヤムスメより低温時期の着莢性に優れており、ハウスやトンネル等の作型に適した品種です。ここでは、本品種の特性並びに栽培のポイントについてご紹介します。

2 新品種『サヤコマチ』の品種特性

当社では、既に極早生種では『サッポロミドリ』、



写真1 サヤコマチ (SB1003) の草姿

『春の舞』を、中早生種では『ユキムスメ』、『美園グリーン』、『キタノズ』および『サヤムスメ』を、また、中晩生種では『サヤニシキ』をそれぞれ発表し、各産地でご好評いただいております。特に最近では、濃緑、大莢で外観に優れるサヤムスメの人気が高く、単価のよい早出しでもサヤムスメを出していきたいとの要望が強まっています。サヤコマチはサヤムスメと同じ中早生種に属しますが、ハウス、トンネル等の移植栽培ではサッポロミドリ並みの熟期まで早生化し、サヤムスメ並みの大莢で、さらにサヤムスメより低温時の着莢性に優れた品種です。

1) 早晩性

直播での露地（マルチ含む）栽培においては、ほぼサヤムスメ並みの中早生種に属し、関東平坦地での標準露地マルチ栽培で約83日程度の生育日数となります。ただし、移植による早播き栽培で

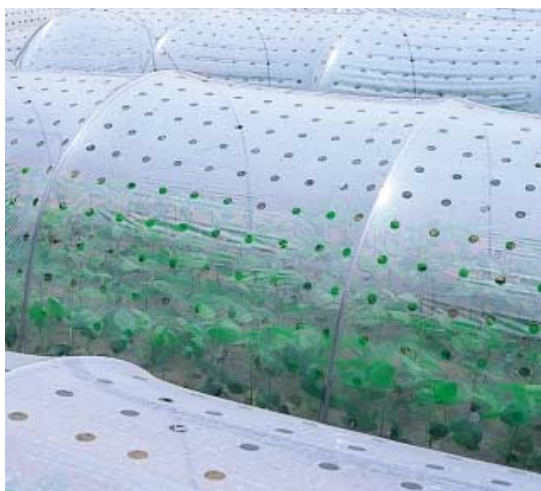


写真2 トンネル栽培風景 (有孔トンネルでの被覆が一般的)



写真3 サヤコマチのトンネル栽培での草姿

エダマメ主要品種熟期一覧 (直播栽培)

極早生種				早生種			中早生種 (生育日数*)			
75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85日
春の舞				キタノズ						
サッポロミドリ							美園グリーン			
							ユキムスメ			
							サヤムスメ			
							サヤコマチ			

生育日数: 関東平坦地(4月中旬播種、露地マルチ栽培)標準。

エダマメ主要品種熟期一覧 (移植・早播き栽培) (生育日数**)

82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92日
春の舞										
サッポロミドリ										
ユキムスメ										
サヤムスメ										
サヤコマチ										

生育日数: 関東平坦地(3月上旬播種、トンネル早熟栽培)標準。

図1 直播と移植栽培における品種の早晚性の変化

はサヤムスメより3日程度熟期が早く、ほぼサッポロミドリ並みの生育日数で収穫適期を迎えます(図1)。

2) 草丈

サヤムスメと似た草姿をしており、葉は濃緑でやや小さく、葉柄はやや上向きに伸びます。移植早播き栽培においては、サヤムスメより主茎がや

や細く、節間が伸びやすく、主茎長はやや長くなる傾向がみられます。サヤムスメ同様分枝の発生が比較的少なく、葉かきの手間が少なくすみ、枝付き出荷には向いています。

3) さやの特性

さやは白毛で、サッポロミドリ並みの莢色でサヤムスメよりやや淡い色ですが、サヤムスメ同様大莢でボリューム感があり品質に優れます。ただし、さやの太りはサヤムスメと似てやや緩慢で、収穫期の後半になっても膨らみは中程度で止まります。

4) 収量

サヤムスメと比較して着莢数がやや多く、多収となります。特にハウス、トンネル等の早播き栽培ではサッポロミドリより着莢数がやや少ないものの一莢重が重く、サッポロミドリと比較してもやや多収となります(表1)。

5) 食味

サヤコマチの食味は適期収穫では良好ですが、前述のとおりサヤムスメ同様やや収穫適期時のさやの膨らみがあまいため、収穫遅れになる危険性が高く、結果的に食味の評価が芳しくないといった懸念もあり、必ず適期で収穫するよう注意が必要です。また、食味については品種特性と併せ、収穫後の鮮度保持等が極めて重要であり、食味の良い高品質の枝豆生産にあたっては、これらの要因に対しても十分留意する必要があります。



写真4 ハウス栽培風景 (ハウス内もトンネル被覆で温度・湿度を確保する)



写真5 サヤコマチの着莢状況

表1 『サヤコマチ』の主要特性および収量(試験成績) (雪印種苗株式会社)

品 種 名	開花 始め (月/日)	収穫 適期 (月/日)	主茎長 (cm)	主茎 節数	さやの 大小 (9~1)(9~1)	黄色	莢長 (cm)	莢幅 (cm)	規格内 収量 (kg/a)	3粒 莢率 (%)
ハウス半促成：平成10~11年2月26日播種、平成10年~11年3月9日定植(2か年平均)(千葉)										
サヤコマチ	4/15	5/20	37.9	7.3	7.5	6.8	6.28	1.46	62.0	11.7
サヤムスメ	4/16	5/21	33.6	7.1	7.7	7.2	6.37	1.43	62.6	18.8
サッポロミドリ	4/17	5/22	32.3	7.0	6.5	6.9	5.62	1.40	54.9	25.9
トンネル早熟：平成10年3月10日、平成11年3月12日播種、平成10年3月23日、平成11年3月24日定植(2か年平均)(千葉)										
サヤコマチ	4/30	6/5	31.1	7.3	7.5	6.5	6.19	1.48	67.0	20.8
サヤムスメ	5/1	6/6	28.3	7.0	7.9	7.4	6.46	1.47	63.7	18.6
サッポロミドリ	5/1	6/6	27.1	7.0	6.8	6.8	5.43	1.42	65.6	28.1
トンネル早熟：平成10~11年4月13日播種、平成10年4月27日、平成11年4月26日定植(2か年平均)(千葉)										
サヤコマチ	5/21	6/27	36.3	8.3	7.5	6.5	5.97	1.49	110.4	23.1
サヤムスメ	5/21	6/29	33.4	7.7	7.8	7.3	6.30	1.47	106.3	23.4
サッポロミドリ	5/22	6/28	30.8	7.1	6.5	6.5	5.33	1.42	108.2	35.4
露地マルチ：平成10~11年5月20日播種(2か年平均)(秋田)										
サヤコマチ	7/6	8/12	42.2	11.2	7.6	6.7	5.84	1.43	113.9	35.6
サヤムスメ	7/7	8/14	42.3	10.8	7.7	7.3	6.13	1.44	105.5	39.2
サッポロミドリ	7/3	8/7	30.6	8.8	6.9	6.7	5.44	1.44	66.9	32.1

評点基準...さやの大小：9(大)~1(小)、黄色：9(濃緑色)~1(淡緑色)

3 適作型と上手な利用法

基本的にはハウス~トンネル~露地の各作型での栽培が可能です。ただし、本品種の特性を生かす上では、ハウスおよびトンネル栽培等の低温ストレスを受けやすい作型で、より特性を發揮させることが期待できます。特にサヤムスメが比較的高温域での着莢がスムーズにおこなわれる反面、低温域ではやや着莢性が不安定になる傾向がみられることから、サヤムスメの前作型に熟期のやや

早いサヤコマチを組み入れることで、比較的早い作型から継続しての出荷が可能となります。3月下旬以降のトンネルや4月中旬以降の露地マルチ栽培ではサヤムスメのほうが莢色も濃く、サヤムスメ本来の収量性を確保しやすくなるので、サヤムスメの前に収穫する品種としての組み合わせが極めて有効です。

4 栽培のポイント(ハウストンネル中心)

1) 草勢をしっかり確保

前述のとおり草姿はサヤムスメに近く、通常栽培の中では十分草勢を確保することは可能です。多少の多肥栽培においても、サッポロミドリのように大葉になったり主茎が異常に太くなることが比較的少ないので、肥培管理については

概ね一般的な管理で問題ありません。ただし、何らかの理由で草勢が確保できず貧弱な状態で開花を迎えると着莢は極めて不良となり、低収の最大の原因となるので、必ず草勢をしっかり確保するよう注意が必要です。草勢が確保できない要因はいくつかありますが、主に以下のようなことが挙げられます。

温度不足(特に生育初期からの低温)

乾燥(土壌乾燥および空気中湿度の乾燥)

老化苗での移植(本葉展開期以降での定植)等



写真6 サヤコマチの切り枝での出荷姿

2) 開花期の温度・湿度管理が重要

枝豆は元来極めて着莢率の低い作物で、温度や乾燥などの環境条件によって着莢率はさらに大きく変化します。特に開花期は最も影響を受けやすい時期にあたり、とりわけ本来の自然条件と大きく異なるハウスやトンネル栽培においては、開花時期の春先の天候不順が大きく影響します。着莢すべき花が落ちてしまうと、莖葉部が2次生長を始め、さらに莖が太くなったり、葉肉が厚くなったりして、花も長期間に渡って咲き、結果的には十分な収穫に至らないこともあります。品種による着莢の安定性に差はあるものの、基本的には十分な温度、湿度の確保が極めて重要となります。開花期間中（開花始めから10日間程度）の目標温度は以下のとおりです。

- ・ 日中：30℃以上（湿度も確保）
- ・ 夜間：15～20℃

3) ばかにできない風の影響

前述のとおり、開花期は生育期間中最も環境ストレスを受けやすい時期にあたり、温度や湿度以外でも管理面においては細心の注意が必要です。特に風は倒伏を招き、その後の着莢不良や収穫作業まで影響してきますので、できるだけ倒伏しないよう風除け対策が必要です。とりわけ、ハウスやトンネル栽培では徒長気味に生育するため、風速10m以下でも倒伏することがあり、トンネル除去時は温度管理を含め、風対策も合わせて考える

必要があります。開花以降は莖葉部も徐々に硬く締まって倒れにくくなり、また、着莢後であれば多少の風で落花することもなくなるので、開花期後半までトンネル被覆が可能であれば風対策としても有効です。

4) ハウス、トンネルは無農薬栽培も可能

露地栽培では枝豆のさやを食害する虫が数多く発生して、その防除無しでの出荷はほとんど不可能ですが、ハウスやトンネル栽培においてはさやに影響をおよぼす害虫の発生はほとんどなく、場合によっては殺虫剤を使用しないで済みます。ただし、葉付き出荷の場合は葉も商品となるので、葉を食害する虫の防除が必要となります。特にハウスやトンネルではダニが発生しやすく、乾燥や窒素肥料の多投等、発生を助長させる要因をできるだけ避ける必要があります。

5 むすび

昨年、今年と枝豆の市場相場があまり芳しくありません。天候によって多少出荷量の増加も影響していると思いますが、どこにその原因があるか市場関係者も首をかしげているところです。食生活が多様化し枝豆そのものの需要が減退したのか、またレトルト、加工食品の普及が枝豆にも波及し、家庭でゆでる青果物が敬遠されてきているとの声も聞こえます。実際に冷凍枝豆の輸入量は年々増加しています。

野菜の“旬”が見直されている中、ぜひ今一度初夏の枝豆の一層の需要拡大を期待したいところです。各枝豆産地でも、品質に優れた鮮度の良い枝豆作りに取り組みまれていますが、特に初出荷の枝豆はその年の相場形成に多大な影響をおよぼすことになり、出始めの枝豆で消費者の期待を裏切ると、その後の需要は限りなく縮小してしまいます。

サヤコマチは枝付き産地での早出し出荷を中心に、ハウスおよびトンネル栽培を主体に特性を発揮させることができる品種です。本品種につきましても、先に述べたとおり消費者の期待を裏切らない品質重視の栽培に取り組んでいただき、枝豆の需要喚起の一助になれば幸いです。